シーワールドのアニマル達

●オウサマペンギン

ペンギンの仲間は、現在18種類が知られていますが、ここに紹介するオウサマペンギンはコウテイペンギンとならんで大型の種類です。

オウサマペンギンは、南極海の広い範囲にわたって生活していて、南極大陸の春にあたる９～10月に恋の季節をむかえ、11～４月に卵を１つ産みます。そして直立姿勢のまま、オスとメスで交互に卵を温めます。フ化したヒナは、35～40日間親鳥と共に生活した後、ヒナどうしが集まり集団(クレイシ)をつくります。しかしヒナは、この集団にいる間はまだ自分では餌をとることができず親から餌を与えられ、自分で餌がとれるようになるまでは、さらに10～13ケ月もかかります。

オウサマペンギンは、とても人になつきやすく給餌の時以外でも係員にすり寄ってくることさえあります。しかし陸上での行動はたいへん不得意のようで、雪の上に出ている岩につまづきころぶこともしばしば見られ、その度にくちばしを使い一生懸命起き上がる姿を見ていると思わず笑いをさそわれてしまいます。

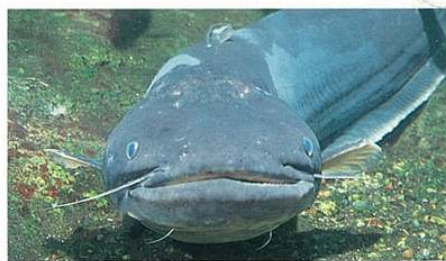
当館では今までにフンボルトペンギン、マゼランペンギンなどを飼育してきましたが、南極海で生活しているペンギンの飼育は初めてのことで、まだまだ知らなければならないことが数多くあります。オウサマペンギンとのつきあいは、まだ始まったばかりですが、大切に飼育し１日も早い２世誕生を楽しみにしています。　　　　(伊藤)

●ビワコオオナマズ

ナマズというと、まず頭に思い浮かぶのは、地震予知に役立つ魚ということではないでしょうか。当館にも長期飼育を行なっている魚の一つにビワコオオナマズがいます。このビワコオオナマズは、琵琶湖特産で成長すると体長１ｍを超える日本で一番大きなナマズです。普段は水底で静止していますが、時折湖の中層までやってきてエサとなる魚を食べます。当館で展示しているビワコオオナマズも日中は動くことがほとんどありませんが、それでも食事の時間が近づくと泳ぎまわり、同居している他の魚を追いまわしたりするので、こんなシーンを見られたお客様の中には「ナマズが騒いでいる。大きな地震でも来るのでは？」と不気味に思われる人もあるかもしれません。

当館へ搬入した当時は、３ケ月間もエサを食べずに係員を困らせたり、ときどき同居している魚を呑みこんだりする気まぐれな面も見せていましたが、今では給餌の際に係員の手元まで寄ってきてエサをねだることもしばしば見られるようになりました。こんな時は大きな口とヒゲ、そしてどこにあるのかわからないような小さな目、どれを見てもなんとも可愛らしく見えてきます。

地味な色彩の多い、当館で展示されている日本の淡水魚の中で、このビワコオオナマズは姿と大きさで人気を一人(？)占めにしています。今日もこの水槽の前ではチビッコの歓声が聞こえてきます。　　　　(島村)

▲オウサマペンギン　*Aptenodytes patagonica*

▲ビワコオオナマズ　*Silurus biwaensis*

さかまた No.35

編集・発行　鴨川シーワールド

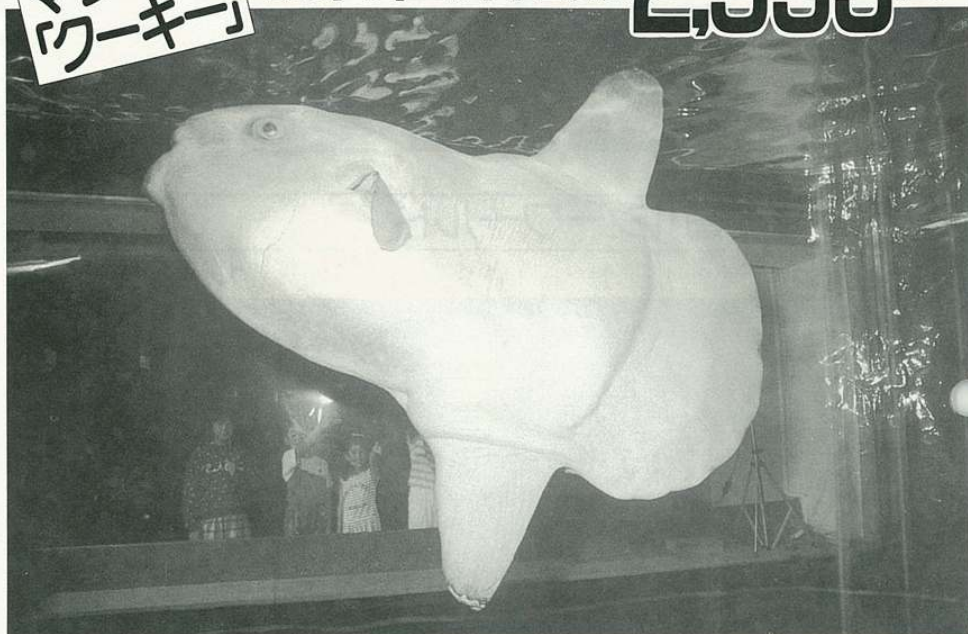
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18

☎(04709)2－2121

発行日　平成２年６月

さかまた

鴨川シーワールド　NO. 35

マンボー「クーキー」 飼育世界記録2,993日

▲飼育世界記録2993日を達成した「クーキー」

飼育世界記録を更新中のマンボウ「クーキー」は、去る3月5日に2993日という飼育記録を残して死亡しました。「クーキー」の死はとても残念なことですが、それでも8年2ヶ月の間、多くの人々にその姿を紹介でき、しかも今まで知ることのできなかった貴重な資料を得ることができたことなど、実に大きな成果をあげることができました。

●マンボウ飼育の歴史

マンボウの飼育は、今から30年前の1960年代前半に始まりました。当時は1ケ月間飼育することさえ困難な時代で、100日以上の飼育ができるようになったのは1974年のことです。このころ当館ではマンボウの飼育研究にとりかかり、マンボウの水槽壁面への衝突を防ぐためのビニールフェンスの設置、消化の良いエサの研究、採集・輸送方法の開発、水質環境のコントロール等を行った結果1979年、「ナンナン」と愛称のついたマンボウが1年以上生存し、ここに初めてマンボウの周年飼育が可能となりました。この技術は他の水族館にも紹介し、その後各地の水族館で長期飼育が試みられるようになりました。当館では次に飼育日数

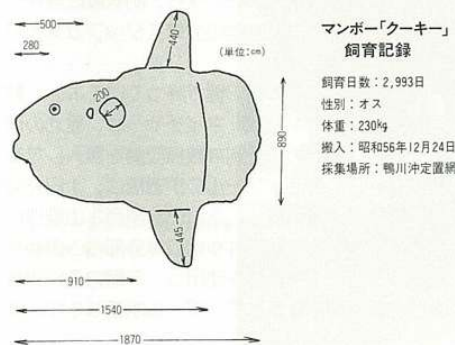
マンボウ飼育世界記録

年	水族館名	飼育日数
1960年	宮島水族館	21日
1970年	京急油壺マリンパーク	37日
1972年	京都大学白浜水族館	47日
1973年	マリンランド・オブ・ザ・パシフィック（アメリカ）	約110日
1974年	桂浜水族館	125日
1978年	桂浜水族館	166日
1979年	鴨川シーワールド「ナンナン」	426日
1980年	松島水族館「ブクブク」	788日
1981年	鴨川シーワールド「ユーラン」	965日
1981年	鴨川シーワールド「ノンキー」	971日
1985年	松島水族館「ユーユー」	1,379日
1986年	鴨川シーワールド「ノロン」	1,538日 放流
1990年	鴨川シーワールド「クーキー」	2,993日

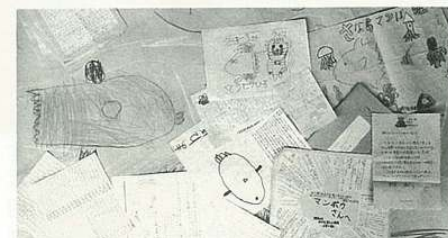
1000日を目標に飼育改善を図り記録に挑戦してきましたが、1981年「ノンキー」、「ユーラン」は目標達成を目前にしてその記録はストップしてしまいました。そしてこの年の12月に「クーキー」と「ノロン」の飼育が始まりました。2尾のマンボウは順調に飼育日数を積み重ね1984年9月19日には最初の目標である1000日をクリアし、1985年10月4日に松島水族館の「ユーユー」の持つ飼育世界記録1379日をついに突破し、その後世界記録を毎日延していきました。1986年3月14日には、マンボウが大きく成長したことと、調査研究のため「ノロン」が黒潮海域に放流されたため、その後は「クーキー」1尾で記録更新を続けました。

1989年12月24日に飼育満8年を迎え、長寿を祈願する2mもある特大ジャンボ絵馬を近くの神社に奉納し、また1990年2月には全国水族館技術者研究会にてその飼育についての報告を行いました。そして1990年3月5日に飼育日数2993日という大記録を残してその記録更新は終止符がうたれました。

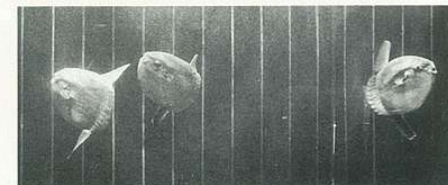
●マンボウはなぜ飼いにくいのか。

飼育下におけるマンボウの死亡原因は、大きく分けると採集時に受けた擦過傷、消化器系に異常を生じたもの、個体間の干渉作用によるもの（大きな個体と小さな個体を同一水槽で飼育すると小さな個体にストレスがたまりエサを食べなくなる）、ビニールフェンスの外に出る等の事故によるもの原因不明の突発的な死亡などがあります。「クーキー」の場合は、12〜1月にかけて食欲不振が見られたことのほかは、特に異常は見られず、3月5日の日も朝8時に観察した時にも状態に変化は見られませんでした。しかし、9時過ぎには水槽の底に横たわり死んでいるのが発見されました。解剖の結果消化管の一部に直径約20cmほどの腫瘍のものがみつかりましたが、これが直接の死亡原因であったのか、あるいは別の原因によるものなのか、現在調査中です。死亡時の体長は、187cm、体重230kgで、性別はオスでした。

●多くの人に愛された「クーキー」

マンボウは1尾1尾にそれぞれ個性があるおもしろい魚です。「クーキー」の場合は、「普段は遠慮がちな性格だが、エサを見るとガムシャラ。」というところでしょうか。どちらかというと穏やかな性格の持ち主だったように感じます。また飼育係をよく知っていてその姿を見ると、飼育係より先に給餌場所で待っていることもしばしば見られました。

「クーキー」が死んだことがテレビ、ラジオ、新聞等で報道されたあと、多くの人々から花束、寄せ書き、お手紙などが寄せられました。「クーキー」がこのように多くの人達から愛されていたことを思うと飼育係の苦労がいささかでも報われたような気がしてなりません。

▲「クーキー」に寄せられたたくさんの手紙や寄せ書き

●マンボウの魅力

マンボウという一風変った響きのある魚名。そしておよそ魚とは思えない形、一般的な食用魚ではなく、珍らしい存在のためかえって親しみが湧くのでしょうか。大海原を大きなマンボウがのんびりと昼寝をしながらプカプカ浮いている姿を想像すると、のどかで口マンチックな光景が浮かびあがってきます。あくせくと毎日を生きている私達の心のどこかにある、憧れの姿なのかもしれません。大人から子どもまでたくさんのファンを作ったマンボウの飼育にはこれからも情熱を燃やして続けていきたいと考えています。　（津崎）

▲新しく飼育の始まった小さなマンボウ

トピックス

ペンギンズ ネイチャー オープン!!

▲人工雪の降る中での給餌

南極周辺にすむペンギンの生息環境を再現した新施設「ペンギンズ ネイチャー」が平成2年3月21日にオープンしました。ここでは、雪の舞い散る下で目を細めるオウサマペンギン、水中をツバメが飛ぶように泳ぎまわるジェンツーペンギン、岩の上を元気にとびはねるイワトビペンギンなどを見ることができます。

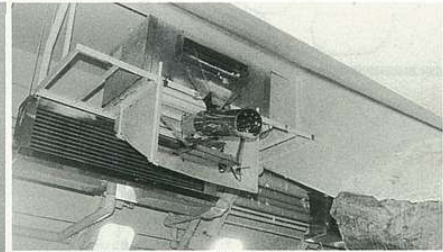
ペンギンズ ネイチャーのオープンにあたり、当館との友好関係にある、アメリカのシーワールドより10羽のオウサマペンギンが特別の厚意により寄贈されました。そして、極地ペンギンの飼育は当館では初めての試みであるため、オープンに先立ち当館の飼育スタッフがアメリカで研修を受けたり、またアメリカからはペンギン飼育の専門技術者を派遣してくれるなど、アメリカのシーワールドからは、当館での飼育について絶大なる協力をいただきました。極地ペンギンは、気温を低く保つことが必要であるため、アメリカからの35時間におよぶ輸送中は、コンテナーには氷がしきつめられ、気温は常に5℃に保ち、防寒服に身をつつんだ、アメリカと当館の飼育スタッフが交代でつきそいました。

アメリカ・シーワールドの係員による技術指導▶

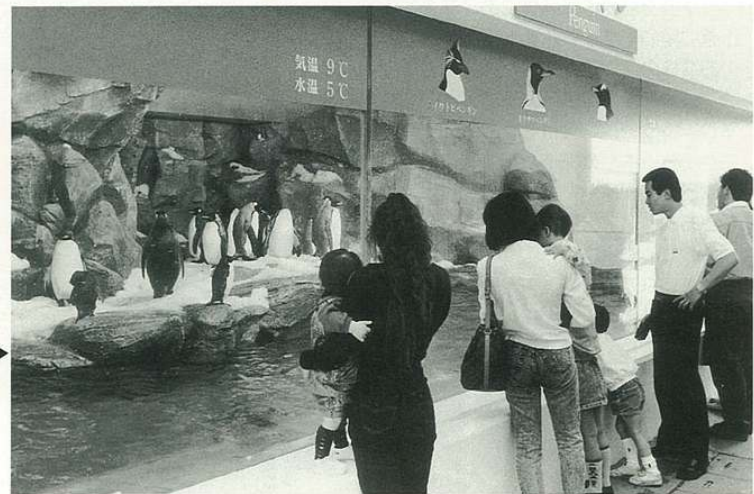
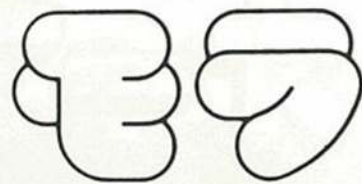
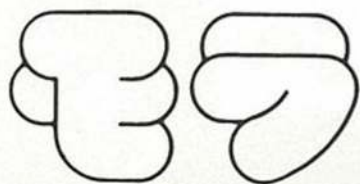
「わー見て!! 本物の雪が降っているよ。」と歓声が上がるペンギンズ ネイチャーは、極地の環境を維持するために特別な機械設備を導入した施設です。ここの海水プールの沪過槽は、1日1300トンの水を沪過循環し、きれいな飼育水の維持に努めています。また天井や壁には外部からの熱を遮断するための断熱材を使用し、7馬力の冷凍機2台を昼夜連続運転して、プール水温は5℃、気温は9℃に保っています。

▲スノーマシーン

▲人なつっこいペンギン達

雪を作るスノーマシーンは、イタリア製で、完成までいろいろな工夫がなされました。試運転の時は雪がなかなか思ったように降らないため、送風機を取り付けてみたり、雪が一ケ所にかたまらないよう、雪の吹き出し口を120°の範囲で首をふるようにモーターを設置したり、係員みんなで知恵を出し合いました。その結果、今では本物の雪のように広範囲に積るようになりました。

南極の一部を切り取ってきたペンギンズ ネイチャーで、ペンギン達が雪の上を歩くユーモラスな動きと、水中でのすばらしい泳ぎをじっくりと観察し、南極の雰囲気を充分に味わってみて下さい。

（荒井・庄司）

ユーモラスなペンギンの動作▶と降雪に歓声が上がるペンギンズ・ネイチャー

●パノリウム上流水槽の改装

「水の一生」をテーマに、川から海に生息する生物を展示しているパノリウムの、川の上流部分にあたる水槽の改装が行なわれました。

新装なった水槽は、ガラスの交換や魚名標示の電飾標示化がおこなわれたばかりでなく、今回は生物をとりまく環境を実物大に再現してみました。山深い渓谷を思わせる切り立った崖や、水しぶきをあげて流れる清流の中を生き生きと泳ぐイワナやヤマメ、あちらこちらの水のしみ出す岩のすき間に姿を見せるサワガニなど、興味深く時間をかけて御覧いただけるよう工夫がなされています。

一段と迫力を増したパノリウムの最初の水槽である新装の川の上流をぜひご覧下さい。

（金銅）

●第2回 研究集会開催

国際海洋生物研究所（略称・国際生研）と鴨川シーワールド主催による「海獣類研究に関する国際シンポジウム－21世紀へのアプローチ－」が2月3、4日の2日間にわたり鴨川シーワールドホテルで開催されました。この研究集会には国の内外の研究者92名が参加し、13題の話題提供にたいし活発な意見交換がなされました。また鴨川市民会館では市民を含めた約550名が参加した「Man & Dolphin」のテーマによるパネルディスカッションとC・W・ニコル氏の「鯨は神か、友か、獲物か」と題した講演もおこなわれ、第2回研究集会は、盛会のうちに幕を閉じました。

（勝俣）

●機械化されたチケット売場

当館へ入園されるお客様が、最初に訪れる場所が、チケット売場です。そこで早くチケットを求めて、魚達との出合いや楽しい動物ショーを見たいとするお客様の気持ちにおこたえするために、正確で早いチケット販売が求められています。このお客様のご要望におこたえして、4月1日からコンピューターによる入園券発券システムが導入され、レシートの発行も含めたスピーディーな販売ができるよう機械化がはかられました。この結果、各種データーも今まで以上に効率的に整理ができるようになりました。

これからもお客様へのサービスの向上に色々と工夫をしながら、楽しく1日園内で過していただけるように努めていきたいと考えています。

（石川）

●新しいシンボルマーク誕生

今年10月、おかげさまで鴨川シーワールドは開園20周年を迎えることになりました。そして、それを記念して新しいシンボルマークが誕生しました。このシンボルマークは海の王者と呼ばれショーで大人気のシャチをモチーフに米国のアニメーターにデザインを依頼し作成されたもので、広く多くの人に愛され親しまれるように愛称を一般から募集したところ、全国から11,183通もの応募をいただきました。その中からシャチの異名オルカとtangency（接触）の結びつけにより〝シャチとの出会い〟という意味をもつことから愛称は習志野市の後藤祐司様からの「オルタン」と決定しました。これからもシンボルマークの「オルタン」を鴨川シーワールド同様よろしくお願いします。

（大屋）